一寸

第九十四号　二〇二三年九月

第九十四号目次

書見備忘録（第四回）　岩切信一郎　1
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（48）　大谷　芳久　9
掠奪文化財のゆくえ（七）　金子　一夫　32
大正・昭和戦前期中等学校の図画教員24　静岡県　丹尾　安典　56
原撫松の日記　Ⅶ　一九〇五（明治三十八）年七月～十二月の書簡　森　登　63
中京・名古屋の銅版画　銅・石版画遺聞91　森　仁史　73
工芸概念の変遷（九）　工芸大学(2)　山田　俊幸　80
《レクラム文庫》の周辺　『一寸』第八十九号～第九十四号目録　91
『一寸』第八十三号～第九十四号　執筆者別一覧　92

書見備忘録（第四回）

岩切信一郎

関東大震災から百年である。一切合切をこの時失った人は多い。岡本綺堂は『十番随筆』（大正十三年四月十五日・新作社）巻頭で、「震災に家を焼かれた私は家財は勿論、蔵書も原稿も、一切のものを失ってしまった。」と、さらに「現在の仮住居は麻布の宮村町で、俗に十番と呼ばれるところ」、「十番は麻布区内で最も繁昌の町の一つに数へられてゐる上に、この頃は私たちのやうな避難者が澤山に入り込んでゐる」とこの仮住居の地名を題名にしている。ちなみにこの麻布で罹災したのが四十四歳、偏奇館の永井荷風であり『麻布襍記』を出版している。画家の水島爾保布は著書『新東京繁昌記、附大阪繁昌記』（大正十三年六月五日・日本評論社）で震災後の帝都風俗動向を伝え鬱憤を晴らす。その正月は「門松廃止注連縄飾り廃止断行」、「バラック遊廓」、「夜警小屋」などの報告がある。表紙にわざわざ「発売／禁止改訂版」の朱色型押しがあって意味深長である。版画の世界では、ここぞとばかり創作版画の強みで河野通勢は、昼間は被災地のスケッチに奔走し、夜には銅板を切って絵をエッチング（銅版画）に制作し、一部は翌年の春陽会へ《震災所見図》として出品。木版の平塚運一は『東京震災跡風景』を刊行。伝承木版技術では、『荒都図絵』の題で木村荘八は木版絵葉書にした。日本画家九名（井川洗厓・浜田如洗・近藤紫雲など）

工芸概念の変遷（九）　工芸大学(2)

森　仁史

(3)金沢美術工芸大学

この学校は一九五五年四月に四年制大学として発足した。しかし、その後もそれ以前も時代の要請によって学校の内実は様々に変遷しており、とくに「工芸」のあり方に応じて、きわめて興味深い軌跡をたどっている。この学校の一九五〇年代の活動については先に第六十九号に書いているので、重複しないように述べたい。

学校設立は一九四六年二月に金沢市議会において武谷甚太郎市長が美術専門学校設立を表明したことに始まっている。敗戦からわずか半年後に新しい美術学校をつくろうとし始めたのは尋常でない素早さと言えるだろう。しかし、この地ではこれ以前、一九四五年十月に石川県美術館が開館し、最初の展覧会に四万人の入場者を集めていたことはもっと瞠目に値する。日本の地方美術館は殆どが戦後生まれではあるものの、敗戦の年のうちに開館し、しかも最初の展覧会を成功させたのであった。戦後の日本が大日本帝国から文化国家日本へと転身を図るうえでかなり先駆けた動きだったと言えるだろう。

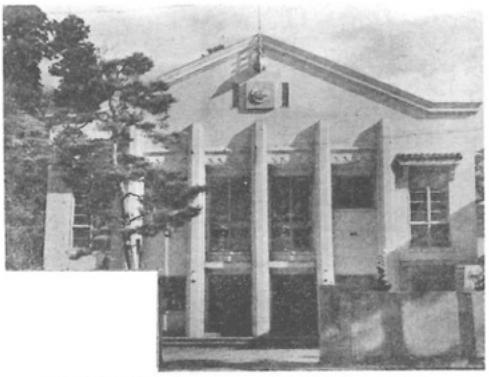
この二つの事業を中心となって推進したのは浅田二郎（一九一〇―二〇〇三）と長谷川八十吉（一九〇九―八二、作家としては八十と名乗る）であったが、数々の僥倖が幸いした。二人は一九三〇年に石川県立工業学校を卒業し、東京美術学校（浅田は図案科、長谷川は鋳造科）を志願した。二人とも工業学校在学中からしばしば校則を破ったか、ストライキを指導したかで、工業学校長が美術学校にこの二名は「要注意人物」であるので「入学を許さないで欲しい」と手紙を送っていた。（高村豊周『自画像』中央公論美術出版、昭和四十三年）鈴川教務掛主任からこれを示された高村豊周助教授は「理屈の通らないことをいう学校だなと思」い、「握りつぶす事には反対だ」と考え、問題を起こした場合には「僕がその生徒の責任をもつ。」と請け合って、入学が叶った。二人はともに一九三五年三月に卒業し、浅田は東宝に就職し舞台美術を担当した。しかし、空襲で大崎の自宅を失い、一九四四年一時疎開のつもりで郷里に帰ってきたが、ここで敗戦を迎えた。このとき、長谷川も金沢で実家の経営する東洋ゴム社長に納まっていた。彼らはともに軍部の指導する総力戦体制に殉ずるつもりは全くなかったので、敗戦を自らの理想の実現の好機としようとした。

浅田の回想（『改札場のささやきⅡ　想い出』北國新聞社、平成四年）によれば、彼が熱望したのは故郷金沢にはなかった美術学校をつくり、美術館を開設することであった。一九四五年八月十七日に浅田、長谷川らは美術館新設を関係者に呼びかけ、二十六日に北陸毎日新聞社で石川県美術館設立準備委員会を開催し、北陸海軍館の転用を決めた。委員会メンバーは次表の通りで、市内美術関係者と経済人、ジャーナリストで構成され、浅井たちは地元の総意を味方に付けようとしていた（『北国美術』第一号、昭和二十二年四月）。

軍都金沢には町の中心部に陸軍第九師団司令部、歩兵第第七連隊、出羽町練兵場、衛戍病院などがひとまとまりに所在していたが、これら

美術作家	畠山錦成（日本画）、高橋勇（金工、石川県工芸指導所長）、長谷川八十、高光一也（油画）、相川松瑞（日本画）、浅田二郎（太字は東京美術学校卒業）
ジャーナリスト	嵯峨保二（北律毎日新聞社社長）、宮下与吉（同専務）、蒲生欽一郎・鴨井悠（同記者）、毛藤一雄
経済人	林屋亀次郎（金沢商工経済会会頭）、浅田啓次（同専務理事）、井村徳二（大和百貨店社長）、直山与二（石川製作所社長）、三浦孫二

は戦災を被らず、無傷で残っていた。本多町に県の誘致した北陸海軍館（図1）があり、浅田はこれを美術館に転用しようと考えた。八月二十七日混雑する国鉄に乗り込んで舞鶴鎮守府へ申請書を持参したのは高橋と相川だった。九月十一日に石川県に永久無償貸与の文書が交付され、平井章県知事と前記設立準備委員会が貸借契約を結んだ。十五日から巡査が立ち会い、浅田は高村の教え子だった板坂辰治（一九一六―八三、一九三八工美校芸科彫金部卒業）など知り合いと北陸毎日新聞社員数名に手伝ってもらい内部の展示品を運び出し、建物前で燃やしたという。



1　石川県美術館（建物妻に浅田デザインの協会マークが取り付けられている。）

美術館開館後の運営母体となることを想定して、十月六日に石川県へ財団法人石川県美術文化協会設立（以下、美術文化協会）を申請し、十一日に認可された。翌十二日に美術館開館式及び美術文化協会発会式が館内で行われ、協会名誉会長に平井章、会長には嵯峨保二、理事長には高橋勇が就任し、浅田も理事となり、事務長を努めた。八月にもうそうした組織づくりの構想があったのかもしれない。浅田は嵯峨に相談して、金沢商工経済会専務理事を務めていた兄である浅田啓次から、林屋会頭や井村社長などを紹介され、支那事変国庫債券、大東亜戦争割引国庫債券の寄付を受けた。これらはもはや紙切れに過ぎなかったが額面は合計一万円に達し、これを基本財産として申請し、一週間で認可を得ることに成功したのだった。

美術館最初の展覧会、第一回現代美術展は十月二十五日に開幕し、会期を五日間延長し三十日に閉幕した。しかし、この建物は十二月三十日占領軍に接収され、一月三日に美術館は兼六園内の商品陳列館に移転を余儀なくされた。五月の第二回展は金沢市公会堂で開催された。

＊　＊　＊

学校開校の翌年に美術文化協会は浅田編集によって『北國美術』を創刊し、「金沢美術工芸専門学校開校記念特集号」と謳った（図2）。学校の設立が協会の活動とみなされていることが如実に示されている。

学校設立のため、金沢市は一九四六年二月に急遽文化部を設け、その部長に県職員だった津沢佐正を任命した。翌月金沢市は美術文化協会と学校の構成につ

2　『北國美術』創刊号　昭和22年4月（表紙宮本三郎画）

いて懇談し、この月に畠山錦成ら十名（宮本三郎、長谷川八十、高橋勇、北出塔次郎、木村雨山、小松芳光、毛藤一雄、浅田二郎、蒲生欽一郎）を嘱託に委嘱した。四月一日には学校敷地として兼六園に隣接した広大な出羽町練兵場にあった兵器庫〔図3〕を候補とし、大蔵省管財支所に交渉した。浅田の嘱託としての職務は市役所建築課で模様替え工事の図面作成であった。三日には市長が上京し関係省庁を陳情に回った。五月には金沢市から文部省に正式に申請が提出された。翌月文部省から視学官らが視察に訪れ、七月十三日に設立が認可された。浅田らの美術学校設立の希望が「平和的文化都市」建設の政策と一致し、行政の意図とうまく重なったのであろう。武谷市長は一九二七年北陸毎日新聞編集長から衆議院議員となり、四五年に金沢市長となっており、その経歴から公職追放となる恐れがあった。実際に四七年二月に市長を退職後、公職追放となっている。つまり、武谷は金沢市長最後の仕事として美術学校新設を熱心に後押しする理由があったのである。九月七日校章〔図4〕が定められたが、これは浅井のデザインになるものであった。十月五日最初の入学式が行われたが、設立表明からわずか五カ月で、しかも年度途中に実現という異例の速さだった。

3　金沢美術工芸専門学校正門
（1909－14年　旧陸軍兵器支廠）

4　金沢美術工芸専門学校校章

学校設立以降の学科編成などの変遷は次表の通りである。

この設立準備の過程で、当初は美術専門学校という呼称が用いられていて、これは浅田たちの思い描いていた美術学校という趣旨に副おうとしたものであったろう。中央省庁折衝のあたりから。名称が美術工芸専門学校に変化しているのだが、それはこの学校に日本政府や地方当局の期待が大きく反映されたからではないかと思われる。金沢でも見返輸出工芸品展が開かれていた時代であり、日本美術工芸交易振興展への市内出品者は全国的にも多かったのだ。この事情を津沢は率直に語っている。

…此の種学校本来の面目たる純粋芸術的理想の追求、別言すれば偉

一九四六	金沢美術工芸専門学校	美術科（日本画15、洋画20、彫刻10）、陶磁科30、漆工科30、金工科15
一九五〇	金沢美術工芸短期大学（三年制）	美術学科（日本画、油画、彫刻）45、工芸科（陶磁、漆工、金工）75
一九五五		美術工芸学部美術学科（絵画30、彫刻10）、産業美術学科60
一九六五	金沢美術工芸大学	美術学科55、産業美術学科（商業デザイン・工業デザイン45、工芸繊維デザイン15）
一九七四		工芸繊維デザインを工芸デザインに変更
一九九〇		美術学科に芸術学10を設置
一九九六		美術科（日本画、油画、彫刻、芸術学）65、デザイン科（視覚デザイン、製品デザイン、環境デザイン）60、工芸科20

大なる芸術作家の養成といふ使命であり、他の一つは実用的経済的使命の達成、別言すれば敗戦後の地方産業と国家経済に寄与するといふ問題である。

…惟ふに戦後の民主化の線に沿ふ意味から国内的に考へても美術工芸を少数特権の階級より多数民衆のものとして広く国民の生活を潤すものとせねばならず、特に工芸に於て其の使命があると思はれる

（津沢「開校まで」『北國美術』第一号）

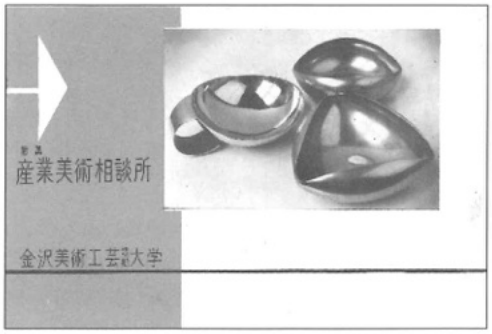
占領下にあった日本は賠償金支払いの重圧にあえいでいたので、その返済充塡のための美術工芸品製作の拡大は実効性のある対策であったはずである。創設時の定員が美術科四十五名に対し、工芸系が七十五名となっているのはそうした期待の表れであり、しかも専攻が地場産業の領域に重ねられたのは経費を負担する地元自治体としての学校設立の根拠であったろう。これは浅田の思い描いた美術学校からやや外れたのではないか。この後、浅田は尾張町文化ホールを手始めに映画興行、劇場運営に軸足を移していった。

設立四年後に短大に昇格した一九五〇年は朝鮮戦争直前であり、工業化による日本の復興はまだ不確かな状態だった。このため、専門学校の定員がそのまま引き継がれ、学校の設置目標に変更はなくて済んだ。しかし、それ以降一九五〇年代の卒業生名簿を見てみると、地元の学校教員となっている卒業生が目に付く。工芸制作の現場で仕事をしている卒業生は極めて少ない。五〇年代後半から本格的に戦後復興が始まると、その主翼は工業生産によって担われていき、美術工芸が再度主役になることはもはやなくなっていく。さらに、戦後生まれの地方の美術学校では知名度が低く、美術では北陸三県以外に受験生を集めることができなくて、工芸では地域の製造現場にそれほど人材を吸収できる成長は望めないという現実に直面していく。一九五〇年には志望者全入、五三年には定員一二〇名に対し志願者が二九名という危機的な状態に陥っていた。

＊　＊　＊

金沢美術短大にとって何らか抜本的な打開策が必要であったことははっきりしていた。一九五五年に大学昇格を目挿すと同時に、美術・工芸科の編成を美術・産業美術学科へ思い切って変更し、しかも産業美術を六割とするという転換だった。

産業美術学科をメインに据えるということは従来の工芸科を削減しないでは実現できなかった。このために実際に馘首の憂き目にあった教員がいなかったわけではない。しかし、工業意匠専攻には塗装（漆工）、金工、製陶専攻コースを維持するという妥協も図られていた。この転換はこの時まだ教授として在職していた板垣鷹穂の構想と市の賛意に基づく方向転換であったと推定したい。学内に市の意向に沿って、産業美術学科発足前の一九五四年四月に「金沢美術工芸大学と地方産業との連関を一層緻密にするため」産業美術相談所（図5）が開設され、市内業者のデザイン活動を森嘉紀助教授（一九二五―二〇一六）らが受託し始めた。森は専門学校創立



5 『付属産業美術相談所』1954年頃

6　ディスプレーデザイン施工例

時からの教員であったが、一九四四年京都工業専門学校図案科卒業であった。同所案内パンフレットには具体的に「建築に関するデザイン、安全色彩（色彩調節）の指導、輸出工芸品に関する指導及試作、商業美術に関するデザイン、工業意匠に関するデザイン、繊維製品に関するデザイン」（図6、7）が挙げられ、市当局の求める市内産業界への貢献に努めていたことが分かる。

7　森嘉紀図案・水野旺鋳造《民生委員制度創始35周年記念碑》一九五六年

一九五五年の時点だと、公立高等教育機関でようやくデザイナー育成に着手し始めたばかりの時期であり、次のように他校の専攻と比較しても規模の点ではそれらを凌ぐ学科だったと言うことになる。

一九四九　東京教育大学教育学部芸術学科工芸・構成専攻六～八名
　京都工芸繊維大建築工芸学科三三名
　千葉大学工芸学部第二類（建築、室内工芸、木材工芸）四〇名
一九五一　東京芸大工芸科工芸計画専攻三五名（一九五九）
　千葉大学工学部工業意匠学科三〇名
一九五四　京都工芸繊維大学意匠工芸学科二〇名

森田校長はこの変化の背景を説明している。

これまでの〝芸術のための芸術〟という考え方はもはや〝生活のための芸術〟でなければならないとされて来ているのだ。安らかな現実生活によってこそ心的な慰めがあるといえよう。要するにこの問題こそ私達に託されたことであり、専門美術教育の本来の目的はこの産業美術家の養成にあると思うのである。（森田「現代専門美術教育の問題点」『けやき』第三号、昭和三三年四月）

また、この時の大学改革は地元発意ではなく、学校内部からであったことにも注意しておくべきだろう。一九五三年三月に市議会、経済人など十八名から成る学制改革審議会が設けられ、美術科・産業美術科への再編案が市から提案されたが、決定に至らずこの年は従来通りの定員で入試が実施された。九月にようやく金沢市案による改組案承認に至っている。この経緯は地域経済界上層のコンセンサスでは次代の経済活動の骨子や行方を踏まえた学校改革を構想することができなかったことを示している。

大学学則には設置目的を「美術、工芸の分野において国家社会に貢献すべき優位の人材を養成するをもって使命とする。」と謳い、産業美術はまだ工芸の領域に位置づいていたことが分かる。工芸科を廃止してからは、デザインとしての工芸がこの学校の校名の定義域に変わったのである。ちなみに、この学校はこの頃からか英語表記をKanazawa College of Artとしていて、名称に工芸は含まれていない。

一九五四年九月の申請時点で、商業美術と産業美術の教員候補とし

8　金沢美大開学記念
講演会展示会ポスター
1956年

9　大智浩講演会「現代の商業デザイン」　1956年

て大智浩（一九〇八―七四）と柳宗理（一九一五―二〇一一）が挙げられており、中央から有力デザイナーを呼ぼうとした。五六年十一月に大学開学記念祭が開催され、両名の講演会、作品展示会を開催している〔図8〕。講演会には会場いっぱいの聴衆が詰めかけ〔図9〕、地域の期待の熱さがうかがえる。

大智は今日では殆ど忘れられているが、一九五三年『アイデア』誌創刊とともにアート・ディレクターを委嘱され、語学が堪能だったらしく欧米のデザイナー、組織から作品を集め、世界の最新動向を誌上に紹介することで、同誌を国内グラフィック・デザイン界のリーダーに育てた。また、柳より早く東京教育大学（一九五〇年）、山形大学教育学部（一九五二年）で教壇に立っていた。一九五四年には亀倉勇策とともに欧米に渡り、ニューヨークのコウゲイ・ギャラリーで個展を開催し、「彼はその使命の本質に取り組み、それをいたずらっぽいユーモアやデザインと色彩の非の打ちどころのない感覚で実践している」(Industrial Design1-6,1954) と好意的な評価を受けている。次いで訪れたパリでは国際グラフィック連盟AGI日本代表を委嘱され、帰国後、亀倉、早川良雄らと支部結成を果たした。

創立十年を経て学校は自律的な運営を可能とするようになったということだろうか。ただ、大智と柳は申請当初から講師として挙げられており、筆頭の教授は五井孝夫（一九〇四―八六）であった。五井は金沢出身の谷口吉郎の妹と結婚し、一九五四年から金沢で建築設計事務所を営むと同時に、谷口設計の建物の設計監理を任されていた。後、一九七五―八一年に学長を務めている。

さらにその十年後には、工芸繊維デザイン専攻を産業美術の一角としてはっきり分離することになった。この年に政府は伝統工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）を公布し、「一定の地域で主として伝統的な技術又は技法等を用いて製造される伝統的工芸品」の推進を政策として取り上げ始めていた。つまり、高度成長の終焉とともに、工業化の進展の元で時代に取り残されてしまった伝統工芸品を再度称揚し、保護しようとする政策に同期するものだった。この間、学校は出羽町から旧金沢刑務所跡地に移転し、市建築課設計になる新校舎〔図10〕の設計管理は五井が担当した。

10　小立野新校舎正面　1972年

＊　＊　＊

一九八五年金沢市は基本構想を策定したが、その冒頭に「継承された文化と新しい文化、伝統産業と高次化や先端化が進む産業、…創造性に富み、個性豊かな魅力ある都市」と自己認識している。この時期から、金沢市はことさら継承や伝統を強調する姿勢を露わにしていく。一九九六年に学科を美術・デザイン・工芸科の三科編成としたが、教授陣は伝統技法を現代美術の領域で用いる作家たちであった。つまり、伝統工芸展の枠組みの中で製作する地元制作者とは活動現場が乖離していた。現実には衰退しつつある伝統工芸を希少種として逆に地方都市のシンボルとして売り出していこうとするのが自治体の意向だったが、以後はこうした市の政策に大学教育が従属する関係が展開される。

一九九五年　金沢市、世界工芸都市宣言
二〇〇五年　金沢ファッション産業都市宣言～大学院ファッションデザインコース設置
　　市政一二〇周年記念「令和の百芸比照」～作品収集
二〇〇九年　ユネスコ創造都市ネットワーク（クラフト&フォークアート）
二〇二〇年　ファッションデザインコース廃止

金沢の伝統工芸は一九九〇年代初頭にピークを迎えたが、もっとも生産額の大きかった友禅染でも二〇一〇年までに生産額は八割減少し、友禅作家も同様に八割減少している。他方で古都金沢は観光都市として、二〇一五年には人口四十六万の町に初めて来訪者が一千万を超え、以後も増加している。工芸は古都の「金沢らしい歴史・伝統文化」の一端を担う存在と位置づけられている。このために工芸都市宣言やユネスコ創造都市を市としても大きく強調する必要がある。金沢藩が集成した工芸品見本「百芸比照」を市政記念事業とするのはこの流れに沿った事業であった。この作品収集は大学教員が担ったものの、実際の授業はこうした伝統技法の世界とは接点が薄いままで、市中や観光向けの伝統保存とはずれたままである。瀕死の伝統では展望が開けないから、並行して「新しい文化」を育てようとファッションコース設置に至ったが、地方都市の政策だけでは未来を開くことは難しく、短命に終ってしまった。

この学校では、(1)学校創設の一九四〇年代には工芸は地場産業の伝統技法を指していたが、(2)大学に昇格した一九五〇年代半ばにはほぼデザイン領域を指すことになった。そして、(3)三科体制となった一九九〇年代半ばには再び工芸は伝統技法領域を指すようになったが、このときにはかつてのように日用品製造ではなく、美術表現の手段に変遷していた。近現代美術の領域で日本における美術概念が見直されるなかから、従来の伝統技法にポスト・コロニアルな意味がを開く鍵として見直される動きと同時並行だった。それは失われゆく日本の美意識の転生とみなすこともできた。今年十月にさらに旧金沢大学工学部跡地に移転するに際し、デザイン科の再編、大学院映像専攻の新設など時流に沿った改組をすすめているが、この学校が二十一世紀における工芸領域を基軸とした新たな地平の導き手となりうる路を自覚して進むことを願って止まない。

＊　＊　＊

ことのほか厳しい猛暑を乗り越え、どうにか九十四号を刊行することが出来ました。今回は編集子の原稿が一番遅れてしまいました。その間にも順々に原稿が送られてきて、夏休みの宿題さながら追い詰められ、重い腰を挙げたことです。全く原稿を執筆しなかった村田さんの心境が何となく分かる気がします。

大谷氏や金子氏はともかく、山田氏の原稿が写真なしでも珍しく長文、そのひょうひょうとした健筆ぶりに驚かされます。その台割をどう調製するかということで、「執筆目録」と「執筆者一覧」で頁を埋めた次第、今回も九十六頁と分厚いものになりました。

本誌七十号・八十二号で「執筆者一覧」を掲載しているので、それと合わせて頂ければ、各同人の執筆が分かるかと存じます。それにしても各人が思い思いのことを、二十三年間余書くも書いたりという感慨を新たにします。さすがにここまで号を重ねると、新しい読者が増える訳ではなく、読者も興味のあるものしか読まぬようです。かつて創刊号が十六頁であったことが懐かしいことです。

岩切氏は昨年の喉頭癌騒動から一年が経ち、喋れない状態から最近では講演であちらこちらと飛び回っています。長年の蘊蓄の深さには何時もながら感心します。大谷氏は『一寸』命のように朝鮮問題を掘り下げています。ヒョウタン島さながらに何処へ行くのか分かりませんが、日本の犯した罪は深いものがあります。

金子氏は押し迫った老いにあがらうように、淡々と調査に明け暮れています。今回は静岡に三日間滞在したと言います。時には知識に裏付けされた軽妙な原稿を読みたいものです。丹尾さんも『一寸』に関してマイペースながら収書同様に有り余る知識の集積を、御自身の言葉で披瀝してくれたらと思うこと頻りです。

姫路の森仁史氏も忙しく飛び回る中で、近代日本デザイン史を着々と積み重ねています。今回は古巣の金沢美術工芸大学ゆえに思いは深いことでしょう。山田氏には同人費の滞納を督促するよりも、宣告された余命を遙かに過ぎた今、書けることを書き続けてほしいものです。

編集子は最近、書籍の編集・制作がめっきり減ったせいか、忙しく動き回っていた時の方が、原稿執筆も進むようです。出版と共に飽きもせずに銅版・石版・印刷史の片隅を書き連ねています。一つのことに集中したせいか、私事ですが、今回、愛知県の西尾市岩瀬文庫から「岩瀬弥助記念書物文化賞」という五年に一度の賞を戴くことになりました。これも今まで出版や執筆でお世話になった方々、そして『一寸』同人のお力と思います。感謝。

書痴同人

＊青木　茂
岩切信一郎
大谷　芳久
金子　一夫
丹尾　安典
＊村田　哲朗
森　登
森　仁史
山田　俊幸

一寸　第九十四号
二〇二三年九月三十日 発行
定価九〇〇円（本体）
発行者　書痴同人
発行　学藝書院
鎌倉市材木座一-一一-三
制作　森　登